

2022年11月

課題本 『猫を棄てる 父親について語る時』

村上春樹/著 高妍/絵 文藝春秋 2020年

◆◆◆11月の読書会から

毎年ノーベル賞の受賞が発表されるころになると村上春樹の受賞が期待されるのですが、今年も受賞にはなりません。その話題から会が始まりました。なぜ受賞できなかったのだろうかと思っていることを村上春樹の作品の中から話したり、他の受賞者の作品と比べてみたりと色々な分野の意見が交わされました。

今月の課題本は、その村上春樹の『猫を棄てる 父親について語る時』を読み解いていきました。短編でしたが「自分の視点をどこに置いて作品を読み解くか」愉しく語り合えました。人が集えば集っただけの読み解き方、思いがあります。自分の思いを語り、思いを聴きとることで少しずつ視野が広がっていきます。読書会ならでのことです。

村上春樹の文体についても考えることができました。出版された年代からも作品の内容からも 今回の作品を通して村上春樹のメッセージについて語り合った会でした。

(文責:世話係)

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

村上春樹 73 歳の作品。

30 歳でデビューし、それ以来小説やエッセイ翻訳書も数多くあって、世界ではノーベル文学賞の候補にあげられ注目され続けている人物です。

村上春樹も 73 歳になっているのか、と自分も同じように歳を重ねていることも忘れて、その年齢を眺めました。デビュー 5 作品目になる『ノルウェイの森』が最初に名前を意識した作品だったと記憶しているのですが、この作者は、常に旺盛な意欲を維持し続けて、私の中ではそれから年をとらない人なのです。

その村上春樹が父親について語る。

突然、歳をとって村上春樹が現れた感じです。家庭的には彼の実子が居ないそうですが、どうして子供がいないのかを聞かれたとき「自分のような父親は嫌われるにきまっていますから」と答えたという記事を見ました。答えの真意はともかく、自分を父と呼ぶ生理上の子供は居ない。

子供の居ない女性から、実子が居ないことのさみしさの話を聞いたとき、村上春樹は、「実子だけが子供ではない。」と答えたそうです。血に繋がることだけが、自分を受け継いで行くことではなく、自分という〈個体の持つ意味〉が、彼にとっては〈だんだん透明になっていく感覚〉に変化していく事を示しています。「血に繋がるだけではなく」と言い、「それでも繋がるものがある」と位置づけているのだらうと思います。その点では、彼の作品も自分に繋がる「子

供」に該当するのかもしれませんが。

〈偶然がたまたま生んだひとつの事実を、唯一無二の事実と見なして生きているだけのことなのではあるまいか〉いくつもある記憶の断片の積み重ねで自分というものは成り立っているし、それは事実であるけれど、それが自分という個体の全てではないし、事実の全てではない、と言っていると読みました。それが「個の意味が透明になる」感覚をもつことになるでしょう。

〈我々1人1人は、降る雨の一粒ずつなのだ。固有であるけれど交換可能な一滴だ。〉と言います。でも、それだけではないのです。その一滴一滴に、それなりの思いがある、とも。

彼は小説家なので、“具体の人”でしょうから、その一滴がいかなる具体的事実であるかを言葉に変えずには承服できない人。けれども、同時にそれを〈透明になる感覚〉に広げようとします。

最近出会うことが多い「宇宙の構造」の考え方に似ていると思いました。固有の1人には細々した日々の事実があります。その1人1人を集めると1つの地球という星、そういう星を集めると太陽系という1つの集まり。それが集まって1つの銀河系それが集まって・・・ こうして広げた視点からは、個体の日々や父と子に伝わる物語は〈たまたま〉あった1つの事実として埋没して行きます。集合体とみれば、個は交換可能な存在に。

村上春樹は、その個と集合体の関係を〈個を透明にして〉と意識しながら、そこに埋没していない個の存在の意味を書きとめておきたかったのでしょう。父と子の事実を、〈個人的な文章〉だと自認して本に書いたと述べています。

ズームインとズームアウト。一滴の雨水にズームインして描き、ズームアウトして雨という集合体であることを意識する。

両方の捉え方の中で、父についての戦時体験が書きつらねられています。「父親を語る」と言いながら、「父」と言うより戦争によって人生を変えられた「村上千秋」という人物を語ります。殺戮の戦地に送られ、精神の混乱や葛藤を経験した僧である身を「兵にして僧なり月に合掌す」と俳句に託した父。この父の体験を春樹は、ズームインして〈血を分けた息子である僕〉の疑似体験として語るのです。

その「父と子」の関係性については、村上春樹は殆ど語らない。〈父と子の葛藤の具体的な側面については、ぼくとしてはあまり多くを語りたくない〉〈長く生々しい話になってしまう〉と避けています。世の多くの小説の中では、主要なテーマになることの多い父子相克の物語は、この作品では、数行が顔をのぞかせるだけです。

〈父は自分に期待していただろう。時代に邪魔されて歩めなかった人生を自分に代わって歩んでもらいたかったのだろう〉〈でも僕はそのような父の期待に十分こたえることが出来なかった。〉〈父との関係は、すっかり疎遠になってしまった。〉

どのような経緯で20年以上全く顔を合わせなかったのか、それを父の言葉に置き換えることなく〈自分のやりたいことの方が重要な案件だった〉〈自分が護らなければならない自分の家庭があった〉。そんな淡々とした表現で、父子共に頑な性情がぶつかりあう場面を回避してきたことを伺わせます。しかも、その回避状態を解消するための方途を手間暇かけて探し求める気持も無かったと記しています。

父子という縁のようなものに催されて、和解らしきことがあったのは、父の晩年になってから

だそうですから、水と火の競い合いを想像します。

〈ひとつひとつのささやかなものごとの限りない集積〉。それが人生を形作ってきたのだという「子」としての村上春樹。父を語ることも、そういう「小さな歴史のかけらだ」という意識から発すれば、個人の小さな物語ですが、世界全体を作り上げている大きな物語のごく微少な一部なのだという関係性の説き方が解ります。父子の相生も相克も、歴史のひとつのかけらであるという事実に間違いは無いのですから。

『猫を棄てる』という題は、「棄てられる」ということが、父の幼少期の体験の表現とも重なります。飼い猫が棄てられても家に戻ってきていたように、父も、見習い小僧として生まれたお寺から出されたものの戻ってきました。何事も無く過ぎても、心には存在否定で〈棄てられた〉のではなく、進路開拓で〈捨てられた〉ことが傷として残っているかもしれないという、父への後年の理解かもしれません。父の心底は、子よりはるかに複雑だったでしょう。

「歴史のかけら」には、父と子に、それなりの思いがあるのです。村上春樹は小説家です。父を語るといいながら、反戦を含む自分の小説手法を再確認しているのではないのでしょうか。

『猫を棄てる』を読んで

◆【 YA 】

村上春樹は日本全国にハルキストと呼ばれるファンが沢山いる。作品に魅了されたファンも多いと思うが、その人物や考えに同調しているファンも多いとおもう。

作品も多く、翻訳されているものもある。

今回の課題本(猫を棄てる)を読み終えて、彼の心の中に重石となっているのが、父親だと理解できた。あとがきで、いつかは父親のことを書かねばならないと思っていたとある。父親を語ることは、戦争を語ることであり、父親の凄まじい戦場での体験を語り継ぐことにあると思う。

2009年にはイスラエルの文学賞を受賞しながら、体制を壁に、個人を卵に例えて、どんなに壁が正しく、どんなに卵が間違っているか、私は卵の側に立つと強調。又壁は私たちを守ってくれると思われるが、私たちを殺し、又他人を冷淡に殺す理由にもなると述べている。

2014年には、ドイツのベルリンで英語で一般聴衆を前に反戦の講演をしている。

2019年にはスペインで福島原発事故の考えを述べ、自分も含めた日本人の責任にも触れている。

今現在、活躍している作家が、現地で政策や政治を批判しているのは、私は彼しか知らない。又ラジオやオンラインで、度々反戦や平和を訴えている。

猫を棄てるで、印象に残っている場面がある。冒頭の父親が子供の春樹を連れて、猫を棄てに往く。何故子供を連れて？ここで父親の固い強い決心を感じた。自分の戦争にまつわるしがらみを取り除き解放されたい、物ではダメ、命の有るものを棄てる。家に帰ると、棄てたはずの猫が先に帰っているのを見て、父親がホットする場面。父親はここで、自分から、戦争を切り離すことは出来ないと思信したと思う。

中ほどでは、父親の戦争のことが長く語られている。戦争は簡単に、人間の精神、肉体を蝕

む。父親も置かれた立場もあるが、人間の尊厳をも否定するような行いがあった。息子は一度父親から、体験を聞いている。父親との軋轢や相違が長い疎遠をもたらしたが、この父親が、日本に帰ることが出来たことで、今自分の存在があると、述懐している。自分は父親との命の繋がりがあある。父親のことを書かねばと思う。本の中では、一滴の水の例えで語られている。そして終わりで(猫を棄てる)のまとめのように、先に帰っていた猫が、高い木に登って、降りて来るのを誰も見ていないし、死んでいるのかもわからない。

降りることは、上ることよりずっと難しいと言うことを一般化するなら、こう言うことになる[結果は起因をあっさり呑み込み、無力化していく。それはある場合には猫を殺し、ある場合には人を殺す]と。

世界で起こる事態もこうして起こっていくのではと、思う。短編だったが、人の延々と継承されてゆく歴史、個人の思いが愛しくなる。

◆【TK】

長年読書会をして本も沢山読んできたのにお恥ずかしいことで、村上春樹さんの本は一度も読んでいませんでした。有名な方でファンも沢山います。

楽しみに読んだのですがこれは、小説ではなく自伝みたいでした。父親の事と猫を飼ってたときの話があります。

それにしても父親が中国に行つての話は私としては聞きたくなかつた話でした。聞かなかつた方が良かった。でも村上春樹さんはあえて戦争の話を残したかつたのでしょうか。この本を通して。

戦争はしたくないけどわくにはめられた重圧の中で人生を送るしかなかつた父親の世代の人達。

私は猫は思い出を表していて棄てようとしても棄てられない。猫が、庭の木に登つても降りにくいように、記憶を元に戻すことはできない事をしてると解釈しました。

父親も文学に傾倒した方でしたがそれがきっかけで戦争よりもそっちで頑張るように勧められて戦争から逃れられている。文学に生きなさいと勧められるほどの生き方は感心しますが息子村上春樹とは小説活動をすることでかえつて息子と距離をとっている。しかも20年くらい。

こんなに小説を書くことで活躍するのに何が気にかかるのか？そこを知るためにもう一回読んで見ないと良くわからない。

最後に戦争の体験の思いを雨の一滴に例えていた。
戦争の話となると辛くて読めなくなる私です。

◆【T】

作者は20年近く父親と交流が途絶え、顔も合わせない状況であつた。20年ぶりに会つたのは父が亡くなる前で、その時父は90才になつていた。なぜ20年もの間不仲の状態だつたのだろうか、二人の間にはどのような葛藤があつたのだろうか。

父はとても学問の好きな人で、仏教系専門学校から京都帝国大学に進んだ。その間、三度も出征しなければならないことになり、兵役が終わったときには、ある程度の年齢になっていたということや、家族を持っていたので仕事をしなければならなかったことなどから、もっと学びたい、研究したいという思いがあっても学問を続けることがかなわず、甲陽学院の国語教師となった。父の目から見ると、熱心に勉強しない作者に対して(こんな平和な時代に生まれて、何にも邪魔されず、好きなだけ勉強できるのに、どうしてもっと・・・)という思いがあった。

作者は、その期待に応えることができなかつたし(僕が成長し、固有の自我を身につけていくに従って、僕と父親とのあいだの心理的な軋轢は次第に強く明確なものになっていった。)ので 親子の関係が疎遠なものになっていった。

しかし、20年間顔も合わせない関係であっても親子の関係は切れるものではない。父と一緒に紡いできた年月が自分を形作っているのに作者は気づく。(猫を棄ててに行った共有体験。その時の海鳴りの音、松の防風林を吹き抜ける風の香り。そんなひとつひとつのささやかな物事の限りない集積が、僕という人間をこれまでに形作ってきた。)ということに。

作者は、これを、僕らのあいだを繋ぐ縁のようなものと表現している。たとえ疎遠で顔を合わせていなくても、ふと自分を振り返ったとき自分の中に父親を感じるのではないだろうか。父からたくさんのもを受け継いで今の自分があるということに。

◆ 【 N2 】

B6 サイズのすこし細めの本には、香櫨園の浜に猫を棄てた時の箱より大きめの箱に作者が入っている高妍の絵が描かれ、何処となく懐かしい思い出の雰囲気漂わせている。

父についての話は香櫨園の浜に雌猫を棄ててに行ったときのエピソードから書き始められている。父は小さい頃に奈良の寺に小僧として出され、両親に捨てられたと思う自分と、香櫨園の浜に棄てた猫が重なるのだろうか。題名の「猫を棄てる」と「父について語る時」との接点はここにしか見いだせなかつた。

父村上千秋の戦時体験を含んだ来し方を調べながら父を理解しようとしたのだろうと思って読み始めたのだが、それだけではなく、戦争とそれによって変えられた運命、物事は始めるのは易しいが終わらせるのは難しい、偶然によって物事は決まっていきそれが事実無二のものとなる、我々は一滴の雨水であり交換可能だが、個体としての輪郭を失い集合的な何かに置き換えられても、その一滴にもそれぞれの思いがあり歴史がありそれを受け継いでいく責務がある事を忘れてはならないと書かれている。

父千秋は 20 歳で徴兵され第二十連隊輜重兵連隊に所属。村上春樹は「父が第二十連隊の南京攻略戦に参加しなかつたことがわかり重しが取れた感覚があつた。」とあるが誰でも自身の親が人を殺めたとは思いたくないが、戦争と死は切り離すことはできない。当時の兵役に取られた年齢の人でその経験をせずに過ごせた人が何割いるだろうか。戦争によって運命を翻弄された人はどれほどの数だろうか。父は小学校低学年の僕に自身が所属していた部隊の捕虜処刑の話をし、処刑された中国兵の最期の有り様に敬意を抱き続けていた。処刑に手を下したか否かは解らないが軍刀で斬首された強烈な光景は僧であり兵となつた父のトラウマとなりその話を聞いた自分はそのトラウマを継承したことになる。このように歴史

の本質とは快不快に関わらず事実を引き継ぐことであると書いている。

父は運良くビルマ戦線に行かず無事に兵役を終え、婚約者を戦争で亡くした母と縁があり自分が生まれた。戦争で、望むように勉学に勤しむ事ができなかった父の無念を息子は受け継がなかった事が父との疎遠のもとなのかもしれない。しかし人格が違い、育つ時代が違い、吸ってきた空気が違うのなら父と息子の齟齬はあり得べきものだと思うし、晩年二人を繋ぐ縁で言葉を交わす事が出来たのだから良かったのではないだろうか。

最後に子猫が身の程以上の高さまで木に登り、降りることが出来ずそのまま死んでしまったかもしれない描写は、遠方の戦場まで行かされ撤退できず屍を晒したままの兵隊の姿と重なっているのだろうか。

◆【 K子 】

読書会は楽しい！！今回の幕開きは「棄てる」と「捨てる」の相違。

何故、作者は「棄てる」の方を使用したのか？（文中に1カ所両方が使用されている頁があります。）ここではっきり使い方の相違がわかります。

次に沸点に達したのは「村上春樹」はイネ派といやいや、格好のつけすぎ論。それぞれの主張があつてすごい！それだけ深く作品を読んでいる証。タイトルの下に細字で「父について語る時」とあります。

父（千秋さん）は国語に強く、俳句も多く詠んでいます。母親はもと国語教師。もの書きになった要因は十二分にありますが…

でも作者が 18 歳で家を離れるまでの間、父親との密な話は登場しないのです。父親と作者が猫を棄てていった行為についても特別になにも…

父親が少年春樹さんに自分の戦争体験については語っているのです。その中にオットこれは「反戦」について書いたのだと言う「件」が出てきます。20 年以上も全く顔を合せなかった親子ですが、千秋さんを借りて春樹さんがここで戦争のことを書いておかねばと思つての本と思います。

現状に起こっている戦争についてもひっかけているのでは？

本編の中に飼っていた子猫が木の上に登って降りてこれなくなったとあります。この件についてもその後どうなったとも書いていません。読者の皆さん考えましようですかね(?) 会員の方がこれは今のロシアとウクライナの事を言っているのではと…

村上作品にしてはとて薄く挿絵もあつて手に取りやすい本です。

でもご用心アレ。中身は考えさせられますヨ！

読書会で最後に話題になったのは

{ 五木寛之さんは戦争について実体験として語り
村上春樹さんは父の千秋さんを借りて一寸離れて語っている }

とても興味深く聞きました。

◆【 望月悦子 】

題名の「猫」？これは何 何を意味するの？「捨てる」ではなく「棄てる」何故？などと題名に疑問を持ちながら読み始めました。

「父」と「僕」と「猫」との他愛もない日常生活を回想しながら書くことが、父について語りやすかったとのこと。一人っ子の僕にとって猫は大事な存在で、父と一緒に愛情を持って過ごした何処の家庭でも見られる光景から、なんだ「猫」はペットだったんだと安堵しました。しかし何で手放すだけの「捨てる」ではなく、廃棄する「棄てる」なのかと。ここに著者の言いたいことがあるのではと、パズルを解くかのように読みました。

著者はあとがきで、「歴史の片隅にある一つの名もなき物語として、できるだけそのままの形で提示したかった。かつて僕の傍にいた何匹の猫たちが、その物語の流れを裏側からそっと支えてくれた」と書いています。

小説家の著者からのメッセージとして、4つのキーポイントがあるように思いました。

一つめは、父とその周辺での戦争体験

「その(戦争)内容がどのように不快な、目を背けたくなるようなことであれ、人はそれを自らの一部として引き受けなくてはならない。もしそうでなければ、歴史というものの意味がどこにあるのだろう(P53)」

残虐な真実を具体的に表現されているのは、歴史として後世の人々に伝えなくてはならないという切実な思いがあることが理解できます。作家で東京大震災を体験した早乙女勝元氏も、戦争は今まで予想していたものとは全然違うと強調し、過去の歴史の事実をきちんと知り、学ぶことが戦争への道にブレーキとなる。平和は歩いて来てはくれないと力説しています。著者は父からの疑似体験から、早乙女氏は直接体験から反戦を訴え平和を希求していることを学ぶことが出来ます。

私たちは度々歴史から学べと言いながら、同じような愚行を繰り返しています。戦い方が時代と共に高度になり広範囲になってきている分、前回の課題本「パンデミック」のジジエクが主張する方法で「何とかしなければ」と思いばかり一層募ります。

二つめは、「戦争というものが、一人の人間の生き方や精神をどれほど深く変えてしまえるかということ(P99)」

無抵抗状態の捕虜を殺害することは、国際法に違反する非人道的な行為とされているにもかかわらず、初年兵や補充兵を戦場に慣れさせるために、殺人が早い方法としてしかも銃殺より刺殺が効果的であると殺人行為を訓示しています。殺す人間も殺される人間も命令には抵抗できないのが戦争で、自分の人間性を殺して慣れることしか方法がない生活を強いられています。もっと怖いのは、戦争に勝つためにはどれ程非人道的人間になるのか・なれるのかということ。

三つめは、「降りることは、上ることよりずっと難しい(P94)」

ハイハイができるようになった赤ちゃんが、目の前に階段があるから天辺まで上がってしまい、後ろを振り向いた時その高さに恐怖を感じて大泣きしながら助けを求める姿をよくみかけます。

戦争は始める時より終わりが難しいとよく言われますが、そのことを著者は「結果は、起因をあっさり呑み込み、無力化していく。それはある場合には猫を殺し、ある場合は人をも殺す」

と主張しています。これが「捨てる」ではなく「棄てる」に繋がっているのだと思いました。不十分な考えで行動し、同調し、煽動し、前後どうなるかもわからないで呑み込んでしまい、八方ふさがりでどうしようもなくなり、降りることが難しく意味もなく時流に流されていく。この点をきっちり認識して行動しなければ、容易くしかも無意識のまま「棄てる」ことになってしまうのだと思うのです。

四つめは、「一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある(P96)」

一滴の雨水を私たち一人一人のことだと解釈する時「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴にすぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴である」。ということは理解できます。更に「一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある。我々はそれを忘れてはならない。」だから死んではならないのです。戦争をはじめてしまったら「集合的な何かに置き換えられていくから」こそ。

戦争＝死についての難しさを真摯に考えなければならないのだと思います。一人一人にはそれぞれの人生があり、性格や思いや考えがあるのに、「集合的な何か」として扱われたら困るのです。それを実践してしまうのが狂人化した戦争なのだと思います。知らされます。

著者の父は俳句を嗜んでいて、どれほど戦時下にあつて救われたことでしょうか。だからこそ息子に「こんな平和な時代に生まれて、何にも邪魔されず、好きなだけ勉強できるというのに、どうしてもっと熱心に勉強に励まないのか」と苦言したくなる気持ちは大いに納得できます。しかし、これも時代の流れで価値観が変わり「僕のような職業の人間にとって、頭の高さよりはむしろ、心の自由な動き、勘の鋭さのようなものの方が重用される」こうした価値観、人生観の違いによって「父は慢性的な不満を抱くようになり、僕は慢性的な痛み(無意識的な怒りを含んだ痛みだ)を感じるようになった」ようです。

人生において、自由に自分の想い・夢が果たせる時代に生きていることは、どれほど幸せなことでしょう。平和のありがたさが身に沁みます。しかしその平和がいつまで続くのやら。ウクライナの人達が、中国の人たちが自由を求めてどんどん今の自国を逃げたり、棄てたりしている時代においてなおのこと。

このような時に、この課題本で今一度「反戦」について考えることができ感謝です。

◆【 MM 】

今月の読書会で出てきたことで心に残っていることは「村上春樹がここで書いた父の経験(戦争中捕虜の中国人が殺されるのを見た、またはそれに関わった)ことが本当にあったことか創作か」、「この随筆にでてくる猫の話(父と一緒に猫を棄てた話と猫が木の上に上がったものの降りられなかった話)は何の隠喩か」について語り合ったことだ。

『猫を棄てる』の中に出てきた父親の戦時中の残酷な話は父から聞いたことであり、作者が経験したことではない。また、父から聞いたとあるがそれが本当かはわからない、置き換えがきく(誰の体験としても成り立つ)、だから創作ではないか、という声が多かったような気がしたが、私の考えは違うものだ。村上春樹は父の死後10年以上たってからの『猫を棄てる』出版に至ったわけだが、父の生い立ちを聞いたり調べたりしてまとめ、書くことによって自分の考えを整理した。小説家であるならば父への想いは小説の中に形を変えて表すことも可能

だが、あえてそうはしなかった。小説の中に「メッセージ」としては書きたくなかった、ともある。村上春樹は彼なりに誠実に父と向き合ったのではないか。だから父の経験を創作することは父親に対して誠意に欠ける行為になるのではないか。だから私はここで書かれた父の経験は本当だと考える。

2つめの猫のエピソードは何を意味するのか、ということについてだが、読書会の前までは猫が木から降りられなくなる話は何を意味しているのかわからなかった。この話は行き場がなく浮いているなあと思っていた。しかし、読書会の中で「これは反戦を意味しているのでは」という話が出た時に腑に落ちた。行くところまでいくのはすぐなのだが、引き返そうと思うときには手遅れだ、これが戦争へ向かった過去と一緒にではないか、今この状態に近づいてはいないか、という警告。「本当だわ。なるほどなあ」と思った。戦争が人の生き方や精神を大きく変える。このことが一番言いたかったのなら、いろいろな表現に埋もれて一番目立つところには来なかったと感じたので残念だ。

今回の読書会ではそれぞれが村上春樹にもつイメージがあって聞いていて楽しかった。「かっこつけ」は共通していたかもしれないが、私が持つ村上春樹のイメージは「洗練された」「おじさん」である。読書会でも申し上げたが、「かっこつけ部門」私の中の優勝は村上龍です……。村上春樹についてマイナスイメージが先行している感があって、何とかフォローしようと頑張ったが、空振りに終わった感じがする(笑)。しかし、好きとか苦手とかとても盛り上がった。どちらにしてもいろいろ言いたいことをそれぞれにもたせる村上春樹は影響力がある作家だと思う。

今回の課題本は小説ではなかったのが比較的読みやすかった。でも、振り返ると「はて、何が言いたかったのかな」と思わせるものでもあった。読みやすくても私が感じたものを人に伝えようと整理するには難しいと思った。村上春樹っているんな例えを用いてわかりやすく表現して解釈は読者にゆだねている。皮をはいでもはいでも実にはたどり着かない。そもそも実はあるのかしら。こう思う私ですが村上春樹は好きな作家です。